



千住 博「風」

〔奈良編〕

鹿に教えられた

「美」の本質

千住 博 日本画家

もう二十年近くも前、小雨が降りしきる秋の夕暮れ、私は奈良公園に佇んでいた。ふいに目の前に、森の神のような大きな老鹿が現れ、次の瞬間、大きな音をたてて倒れてしまった。一体何が起きたのか？ 気がつくとも今度は、その老鹿と傍らにいる私を囲み、同心円を描くかのように、何百頭という鹿が集まってきて、動かなくなった老鹿を静かにじっと見つめている。あたりはだんだん暗くなる。やがて一頭の若く逞しい雄鹿が走り出した。新しいボス鹿のあとについて鹿たちが一斉に駆け出し、地響きをたてながら若草山の方へ消えて行った。暗闇の中に立ちつくす私と死んだ老鹿を残して。

崇高で神聖なものに出会った——古来、神の化身、森の守り神とされてきた老鹿の死を目の当たりにして、私はそう感じざるを得なかった。そして、画家として何を描くべきかを理解した。単に「モノ」を写し取るのではなく本質的な何かを描かないといけない。それに気づかせてくれたのが、この奈良での体験だった。それから私は鹿の絵を何十枚、何百枚も描いた。だけど描いても描いても鹿との距離が埋まらない。どうやら私はあのときに、大切な何かを鹿に持ち去られたようだ。それは、「美」に関わる鍵穴に差し込む鍵。その鍵を取り戻すため、絶えず探し、絶えず追いかける人生が始まった。初めは鹿を、そして求める心が引き寄せた新たなモチーフ、滝、海、砂漠、雲……。描き続けることで、失くした鍵を見つけようとしているのだが、まだ見つからない。私にとって奈良は、画家としての原点とも言うべき、特別な地なのである。

実は、私を奈良に惹きつけるものは、もう一つある。シルクロードの終着点、天平文化が花開いた奈良。毎年秋に開催される「正倉院展」は、「日本の中に世界があり、世界の中に日本がある」ことを気づかせてくれる貴重な機会だ。こんな素晴らしい宝の山があるのに、日本人が西洋にばかり目を向けがちなのを残念に思う。もっと自分たちの足元にある偉大な文化を自覚した方がいい。そうして奈良に足を運べば、もしかすると私のように、一生を左右するようなドラマに出会えるかもしれない。奈良は特別な地なのだから。■



せんじゅ ひろし

日本画家：京都造形芸術大学学長

1958年東京都生まれ。東京芸術大学美術学部卒、同大学院博士課程修了。92年ニューヨークを拠点に活動開始、95年「ウォーターフォールズ（滝）」がベネチア・ビエンナーレで東洋人初の絵画部門優秀賞を受賞。代表作に大徳寺聚光院伊東別院襖絵、羽田空港第2ターミナルビル天井画「銀河（GALAXY）」など。画集『千住博の滝』『大徳寺聚光院別院襖絵大全』、著書『美は時を超える』『「美」を生きる』など。

<http://www.hiroshisenju.com/>